



JICA海外協力隊

<https://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>

募集情報はじめ

随時更新中！



JICA北海道(帯広)

〒080-2470
北海道帯広市西20条南6丁目1-2
TEL.0155-35-1210 (代表)



JICA釧路デスク

〒085-8505
北海道釧路市黒金町7丁目5番地
釧路市役所 市民協働推進課
TEL.080-2571-7523

JICA北見デスク

〒090-8501
北海道北見市大通西3丁目1番地1
北見市役所 市民環境部
TEL.080-9525-1332

JICA北海道(札幌)

〒003-0026
北海道札幌市白石区本通16丁目南4-25
TEL.011-866-8333 (代表)



JICA × DOTO



JICA海外協力隊 × 道東

世界も道東も！
みんなを笑顔にする道産子たち

JICA海外協力隊派遣状況 (2022年1月末現在)

派遣中	279人	36か国
累計	53,844人	97か国

このパンフレットでは、

広大な道東地域の各地にゆかりのある

JICA海外協力隊OB・OGたちが、

派遣中の活動から

その経験の活かし方について

ご紹介しています。

皆さまのお近くにも

意外といふかもしません。

ぜひご覧ください。

世界を変える力は、日本を変える力になる

JICA海外協力隊

道東地域から
派遣された隊員

374人

全国から
派遣された隊員

53844人



持続可能な開発目標(SDGs)は、「誰一人取り残さない」社会の実現のため、2015年9月に国連本部で193の加盟国により採択された17の国際目標です。SDGsは、開発途上国のみならず先進国が抱える課題も網羅し、国や地方自治体だけではなく民間企業や市民ひとりひとりの取り組みが求められています。開発途上国で現地の様々な課題解決に取り組むJICA海外協力隊は、SDGsに貢献するため、幅広い分野で協力を展開しています。

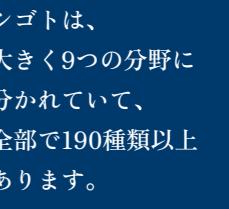
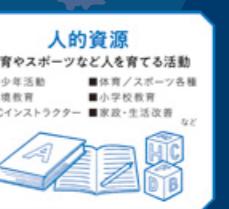
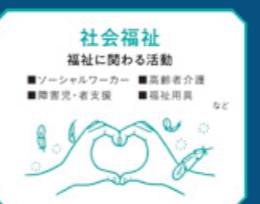
JICA海外協力隊とは？

JICA海外協力隊は、独立行政法人国際協力機構(JICA)が派遣している国際ボランティアです。開発途上国からの要請(ニーズ)に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考・訓練を経て派遣します。その主な目的は3つ

- 1.開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与
- 2.異文化社会における相互理解の深化と共生
- 3.ボランティア経験の社会還元

事業発足から50年以上という長い歴史を持ち、これまでに約5万人を超える方々が参加しています。応募できるのは20歳～69歳の方で、日本国籍を持つ方です。派遣期間は原則2年間ですが、1ヶ月から参加できる短期派遣制度もあります。帰国後は、日本や世界で協力隊経験を活かして活躍しています。

JICA海外協力隊の
シゴトは、
大きく9つの分野に
分かれていて、
全部で190種類以上
あります。



十勝地域にゆかりのあるOB・OGたち 01

二上 信勝 にかみ のぶかつ



派遣国 フィリピン

職種 家畜飼育

活動期間 2003年～2005年

幸せって、モノだけがあればいいわけでもないし、
カネだけがあればいいってもんでもない。

現地での活動

フィリピンに派遣された私の活動は、牛乳の生産を増やすことで、雨季、乾季のある気候の中で、牛に1年を通じてしっかり食べさせられるだけの牧草をどう確保するかが難しいところでした。牧草を長期保存するための技術に、現地酪農家の人たちに協力いただき、一緒に取り組めた時の喜びは、今でも忘れません。

帰ってきてからのこと

活動を通じ、自分の勉強不足を知った私は、大学院に進み、現在は、農業協同組合で酪農・畜産に向き合う毎日を送っています。また、地元のOB会にも参加し、国際協力のイベントなどを仲間とともに楽しんでいます。



- ① ある休みの日、職場の仲間と訪れた先での出会い
- ② 思い通りにいかない活動だったけど、職場の仲間のこの笑顔で「うまくいかないことも含め、いい経験したな」と思える2年間でした
- ③ 職場の仲間、現地の酪農家と一緒に行なった牧草の保管作業

十勝地域にゆかりのあるOB・OGたち 02

日下 裕史 くさかひろふみ



派遣国 ウズベキスタン

職種 野菜

活動期間 2007年～2009年

ヘブンズドアをノックしろ！

現地での活動

女性の経済的自立が困難なウズベキスタン。私は貧困家庭の女性が現金収入を得られるよう、野菜栽培の支援活動をしてきました。土壌の酸度、気候や利水条件などを調査し、栽培法の見直しや新品種の導入などを行いました。



帰ってきてからのこと

帰国後は、教員採用試験を受け、公立高校の教員として働いています。多文化共生の環境で過ごした経験は、教育の現場で役に立っています。

協力隊を経て得たモットー

協力隊での活動を経て得たモットーは、「ヘブンズドアをノックしろ！」。先のことは誰も分からない。周囲が無理だと言うことでも、結果を恐れず挑戦し続けることで新しい事態が切り拓かれます。

十勝地域にゆかりのあるOB・OGたち 03

古茂田 紫乃 こもだしの



派遣国 ザンビア共和国

職種 コミュニティ開発

活動期間 2016年～2018年

相手が大切にしていることを、私も同じように大切にする

現地での活動

「ザンビアで稲作を広める！」という任務のもと、首都からバスで12時間離れた町で、小規模農家さんを対象に収入向上を目指した活動をしていました。「食べるのに栽培方法は知らない」というお米やキノコの栽培の紹介や、収穫後の売り方、調理法や栄養素のワークショップ、家計簿の習慣づけなど、農家さんと一緒に日々コツコツ活動していました。

協力隊を経て得たモットー

「相手が大切にしていることを、私も同じように大切にする」こと。宗教的な考え方、食事に関すること、家族や人とのつながりなど、異文化で驚くことだらけでしたが、彼らが大切にしていることを理解し尊敬の姿勢を持つことで、向こうも私の考えを汲んでくれる場面が増えたなと感じます。これは国に関わらずどんな相手に対しても大切にすべきことだと教えてもらいました。



- ① 地域の収穫祭にて、地元中学生とはりきって披露した「南中ソーラン」
- ② すくすく育つ稻の前で、ザンビア人の同僚が撮ってくれた農家さんとの一枚
- ③ 収穫から脱穀まで全て手作業のザンビアでは、お母さんたちの器用さが光ります

十勝地域にゆかりのあるOB・OGたち 04

曾根(島山) 裕恵 そね ひろえ

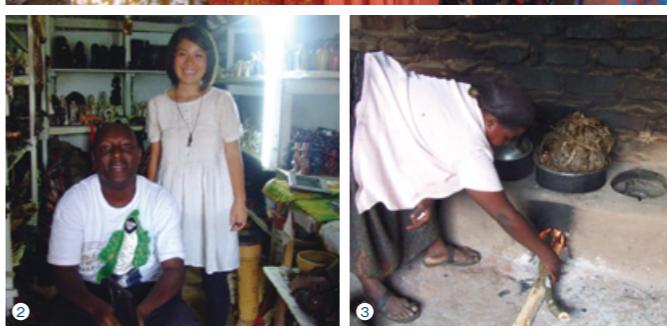


派遣国 ウガンダ

職種 村落開発普及員

活動期間 2009年～2011年

途上国に住む人たちが自分の可能性を信じることができたら、
自国に誇りをより持つことができたら
もっと幸せに生きることにつながるのではないか



- ① バスケットを編んでいた女性グループの皆さん
- ② バスケットを置かせてくれた首都のお土産屋さんの店主と曾根さん
- ③ 改良かまどを作った後。火傷の防止になる、煙が三石かまどよりも少ないため目に優しいといった利点がある

現地での活動

私はアフリカのウガンダ共和国にて改良かまどの普及と現地にある材料で作られたバスケット(工芸品)の販路拡大、配属先の組織改善活動に従事しました。

帰ってきてからのこと

途上国に行き、教育や人材育成の重要性を感じました。浦幌町地域おこし協力隊・農業IT企業に勤務後、Cultura(クルトゥーラ)を設立。実践型インターンシップのコーディネート業務など人材育成事業をしています。

大樹町
在住 泉 拓也 いづみたくや

派遣国 ポリビア
職種 日系日本語学校教師
活動期間 2006年～2008年



Yo no sé la mañana (明日のことは分からぬ)

現地での活動

南米ポリビアの首都ラパスにあるラパス・ポリビア日本文化財団日本語普及学校にて、ポリビア人に対して日本語を教えていました。日本人と出会う機会が大変少ない中でも、日本や日本人に興味を持って、一生懸命学ぶ学生さんたちと触れ合うことを通して、いろいろなことを学んだ二年間でした。

帰ってきてからのこと

ポリビアの後、ラテン文化にさらに興味を持ち、他の国でも働いてみたいと思い、メキシコで12年働いていました。日本語教師として長く働き、メキシコに進出している日系企業のことも知りたいと思い、旅行会社で出張手配などもしていました。日本に帰国するべきか迷っていた際に新型コロナの蔓延を機に帰国することにしました。



① 泉さんボリビアで民族舞踊(フォルクローレ)を踊っていました。
② 薪ストーブに火をつけるのも現在の仕事です。
③ 日本語クラスの授業風景

中標津町
在住 宮長 寛大 みやなが かんだい

派遣国 ブラジル(2017年)
グアテマラ(2018年～2020年)
職種 野球



「You Only Live Once」 YOLO～

現地での活動

小学校からずっと続けてきた野球を大学3年時に引退することになり、一度しか人生を存分に楽しもうと思い、春休み期間を使って、短期ボランティアとしてブラジルで1か月間活動を行いました。長期ボランティアが活動している10か所の地域で野球教室や親善試合を行い、現地の方とたくさんコミュニケーションを取ることができました。その中で、現地の子供たちは純粋に野球を楽しみ、悔しがり、そして色々なことを学ぼうという意欲を感じられ、私自身「野球が大好きだ」という「初心」を思い出すことができました。ブラジルでの活動は、「人生一度きり」と思って様々なことに挑戦することの素晴らしさを感じることができ、貴重な経験になりました。

グアテマラでは、コパンという町で野球競技人口増加のための普及活動として、地域の小中学校へ巡回指導を行うことや、指導者の育成を行いました。活動はそう簡単に上手いくはずもなく、何度もくじけそうになりましたが、地域の人達と協力し合いながら一緒に活動を行うことで、徐々に歯車が合い、目標に向かうことができました。

① 野球教室活動後の写真。(ブラジル)

② 活動中の様子。(グアテマラ)

③ 多文化・多人種が共存する。(ブラジル)

中標津町
在住 矢内(細江) 直美 やないなおみ

派遣国 ジンバブエ(2007年～2008年)
ドミニカ(2008年～2009年)
職種 料理



思い立ったら行動あるのみ

現地での活動

ジンバブエ国ではホテルスクール専門学校の調理科で将来シェフを目指す学生や、現役のシェフへの料理指導を行いました。しかし、ジンバブエは当時ハイパーインフレーションで国中の食べ物、水、電気、ガス不足により思うように活動ができなかった為、ドミニカ国に任地変更しました。

ドミニカ国では2ヶ所の部署に所属し活動しました。成人教育局(成人してからも様々な教育が受けられる場所)で料理教室を開催したり、色々なコミュニティに出向き地域でよく食べられている食材を使った新たなレシピの紹介や料理指導を行いました。水産局では子供達に魚をもっと食べてもらうプロジェクトを開催。地元の漁師さん達と協力して小学校を巡回し、現地にはない色々な魚料理を子供達に試食してもらい、PTAの方々にその料理を指導しました。又、調理に興味がある専門学生達に魚を使って調理指導を行いました。



帰ってきてからのこと

帰国後、まだ世界を見てみたいと思いクルーズシップで働きながら世界を4周した後、調理現場に戻り、レストラン、調理師専門学校、保育園の栄養士、料理教室と様々な仕事に挑戦しました。

協力隊を経て得たモットー

「思い立ったら行動あるのみ」途上国では自分で動かなければ何も前には進みません。待っていても時間だけが過ぎていくだけです。自分でやりたいと思った事は人に頼らず、人任せにせず、自ら行動に移す事が一番大切なんだと身をもって学びました。



中標津町
在住 堀尾 陽二 ほりお ようじ

派遣国 グアテマラ
職種 バレーボール
活動期間 1993年～1995年

和を尊重すると個を尊重するは

同じ意味

現地での活動

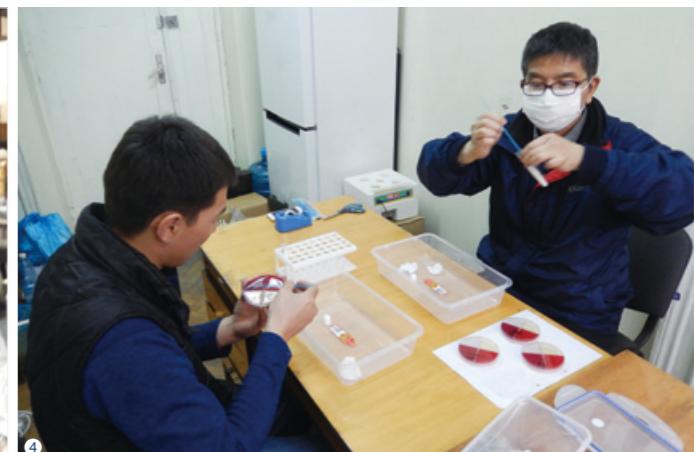
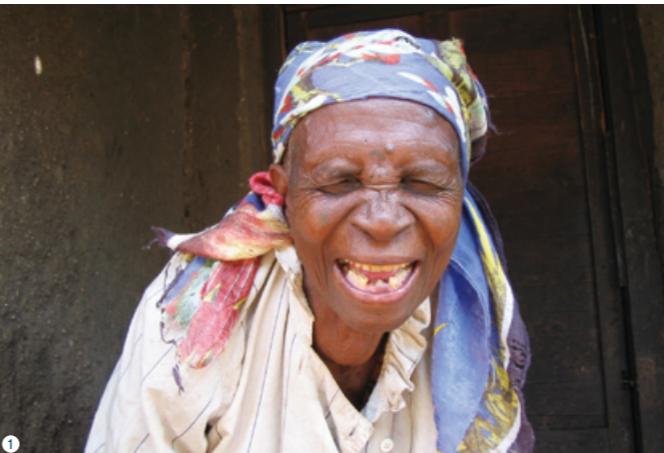
グアテマラオリンピック委員会のコーチとして、ナショナルチームの強化と国内の競技力向上のために各地で巡回指導や指導者講習会などをしました。中米大会優勝を目指して活動し、北中米カリブ各地へ遠征することもありました。

帰ってきてからのこと

帰国と同時にVリーグ女子の小田急ジュノ（平成11年休部）にキューバから選手2人とコーチ1名がやってきて、コーチ兼通訳をすることになりました。その後、生まれ育った北海道に戻り高校の保健体育教員になりました。



① 男女ナショナルチームと中米選手権閉会式後(グアテマラ)H7
② 男子ナショナルチーム環太平洋選手権(コロンビア)H7
③ 函館西高女子バレー部H19



① おばあちゃんの1,000,000 kwacha (マラウイ、ザンビアの通貨)の笑顔(マラウイ) ② 内戦後の復興のために集まった ASEAN諸国からの技術者(カンボジア)
③ 一緒に仕事をした仲間と木下さんの家族との20年ぶりの再会(フィリピン) ④ 予算も器材もない部屋で牛乳の細菌検査(キルギス)



根室地域にゆかりのあるOB・OGたち 04

根室市
在住 八木橋 美花 やぎはし みか

派遣国 タンザニア

職種 水産物加工

活動期間 2010年～2012年

2年間の協力隊活動で学んだことは

現地の人との調和を大切にすること



現地での活動

私はアフリカタンザニアの沿岸部にある水産学校で水産加工の講師をしていました。主な活動は衛生管理や魚を使った加工品の授業、燻製作りや魚の捌き方の実習などです。学校所有の実習船が獲ってきた魚を使ったり、生徒と一緒に市場に魚を仕入れに行って加工、販売までしたりと充実した2年間を過ごしました。

帰ってきてからのこと

帰国してからは介護施設等での調理師の仕事を経て現在はロシアをメインにした貿易会社で働いています。地元根室に水産物を運んでくる船や船員からのさまざまな注文を請け負う仕事をしています。

① 魚の燻製ができるまでの時間、楽しい会話が弾みます。

② 初めて、魚の3枚おろしに挑戦しています！

③ 実習に行く前の生徒達の様子です。みんな待ちに待った実習。とても楽しそうです。

オホーツクにゆかりのあるOB・OGたち 01

北見市
在住 木下 秀俊 きのした ひでとし

派遣国 ザンビア(1989年～1992年) カンボジア(1994年～1995年)

フィリピン(1995年～1999年) マラウイ(2003年～2006年)

職種 獣医師(ザンビア・カンボジア) 家畜飼育(フィリピン・マラウイ)

親より長生きする 相手の立場になって考えてみる

何をしてきたかではなく今何をしているかが重要



写真右／学生実習(マラウイ)

写真左／ダニが媒介する病気の予防のために薬浴槽を泳ぐ牛(ザンビア)

現地での活動

協力員としての最初の活動はアフリカのザンビアでダニが媒介する牛タイレリア病の予防活動でした。2度目は内戦終了後の混乱が続くカンボジアで除隊兵士が通常の生活に戻れるように職業訓練や生活基盤整備を行うプロジェクトの中で、家畜の飼養管理、疾病診断や治療などの技術協力をいました。インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピンそして日本から10人ずつの技術者が参加してカンボジアの復興に関わったこのプロジェクトでは、広島アジア大会に参加するマラソン代表選手の選考会の企画、運営をプロジェクトが実施したり、50人が合宿生活する宿舎の上をロケット弾が飛んで行ったり、 ASEAN諸国を持ち回り夕食作りなど、奇想天外で喜怒哀楽に富んだ日々でした。

フィリピンとアフリカのマラウイでは牛の人工授精に使用する凍結精液の製造と人工授精の普及活動に関わりました。マラウイでは農民グループから選ばれた若者に牛の人工授精研修を行い各地の酪農分野のリーダーとして養成しました。この人工授精により牛乳の生産量が増え農家から喜ばれました。

私はフィリピン生まれの子どもが2人いますが、2人はフィリピンの幼稚園とマラウイのインターナショナルスクールで鍛えられ、たくましく育ったように思います。

帰ってきてからのこと

ザンビアから帰国して国内で小動物病院に勤めていた時期もありますが、カンボジア、フィリピン、マラウイで協力隊事業に携わりました。その後もモンゴル、キルギスなどでJICA技術協力専門家として獣医学教育改善に係る業務、牛乳の細菌検査指導などをしてきました。現在はJICA北見デスクとして、外国人材受入、多文化共生といったJICAの新しい取り組みに携わっています。この課題の意識啓発の一環として、学校や様々な団体での授業や講演もさせていただいている。

オホーツクにゆかりのあるOB・OGたち 02

網走市
在住
道山(中村) マミ みちやま まみ



派遣国 ネパール
職種 農畜産物加工
活動期間 1996年～1998年



一番心に残っているのは現地の人たちの貧しくても家族を大切に暮らす生き方、幸せの在り方を学びました。協力してあげようと考えていた自分たちが最も未熟で、厳しい環境の中で生きる能力に欠けていたこと。

現地での活動

赴任先はネパールの山岳地帯、エベレストのトレッキングルートで有名なナムチエバザールから3日ほど下ったサレリーという村でした。1998年当時で30年間果樹の栽培普及を行っていた地域に農産物隊員として派遣されました。当時はカースト制度がまだ生きており識字教育を受けていない女性や大人が沢山いましたが、ネパールは約40以上の多民族国家でそれぞれの民族が独自の食品加工技術、酒の醸造技術や酵母の採取方法を持っていました。一年間でエリア内の収穫される作物の情報を集めて、各所で地元の加工方法などを活用した食品加工の教室を開催しながら巡回しました。ここでやるの？！というようなもの凄いほって小屋で石を組んでかまどを作ってジャム教室をしたり、重くて運搬に向かない果実のジュースを加工してエベレストトレッキングルートへの販売を生産者と一緒に行ったりしました。加工品を利用する側のロッジ経営者にも調理教室を実施したりしましたが、役人との民族の違いなど沢山のハードルがあり、やりがいを感じつつ、一人の力の小ささを実感しました。

帰ってきてからのこと

帰国してすぐに結婚、出産と生活環境が一変して日本の生活にも子育てにも苦戦しました。まだまだやりたいことがあったような、家族を持つことの大変さと幸せと、色々な感情の中で帰国して8年目はどうしてもやはり農業や食に関わる仕事がしたくてご縁のあった北海道網走に移住。現在の合同会社大地のりんごを起業しました。

協力隊を経て得たモットー

当時お世話になり最も尊敬する元JICAの近藤先生の右腕になっていた有能なネパール人は、その昔先生の果樹園からりんごを盗んだ泥棒だったとか。そんなにおいしいりんごが欲しいならそのリンゴを盗む人ではなく栽培できる人になりなさいと言ってこの泥棒に栽培技術を教えたそうです。最初から有能な人間などいない…あきらめずにそのきっかけや、大切なことを伝える情熱と信念をもってあきらめない努力を続けることを近藤先生の実体験から教わりました。



- ① ニブワという重量があり自由市場には運びずらく活用されずらい果実を使ってスカッシュを作る講習会に参加した農民グループと
- ② ニブワやオレンジの生産地の加工グループと 日本の支援で作られた公共の加工場に宿泊しながら製品を完成させたときの一枚
- ③ 尊敬するムズタンにりんごの一大生産地を作られた近藤先生と隊員仲間と 近藤先生のりんご園で撮影
- ④ 農村の女性グループに特産のりんごを使ったケーキとパン作りの講習会を開いた時の様子

オホーツクにゆかりのあるOB・OGたち 03

斜里町
在住
川端 雄也 かわばた ゆうや



派遣国 パラオ
職種 小学校教育
活動期間 2018年～2020年



日本とはすべてが異なる環境で1人

創意工夫を重ねた協力隊活動で培った

粘り強さや創造力が、新しい力になった

現地での活動

私の主な活動は配属された小学校の算数の学力を向上させること。ドリルや教材をつくりて指導したり、先生たちに授業方法についてアドバイスをしたり、成功した経験は手の指で数えられるほどしかありませんでしたが、果てしない階段を地道に上り続けたそんな毎日でした。実は私は活動をやり切り達成感いっぱいではあります。任期を半年ほど残し別れや感謝の言葉も満足に伝えることもないまま、全世界がコロナパンデミックにおびえ始めた2020年3月末急遽帰国することに。それからまもなく2年になり、パラオでの月日よりも長くなってしましました。しかし苦楽を共にしたパラオ人や同期隊員との日々の記憶は決して薄れることはありません。



- ① 全校みんなでの写真(東京オリンピックホストタウン交流事業での1枚)
- ② 授業の様子
- ③ 同期隊員との写真 (パラオではよくイベントごとにお揃いのアイランドフォーマルを仕立てます)

オホーツクにゆかりのあるOB・OGたち 04

北見市
在住
佐藤 公彦 さとう きみひこ



派遣国 トンガ
職種 電気・電子設備
活動期間 2015年～2017年



トンガは南太平洋に位置する温暖な島国で、時間感覚が日本とは違い非常にゆったりした時間が流れています。



- ① 学校の昼休みに生徒たちと談笑しています。
- ② 火山噴火でもう見ることができないかもしれないトンガの美しい海と空です。
- ③ 自分が住んでいた家の大家さんの子どもたちの写真です。

現地での活動

私は、トンガ科学技術専門学校で電子工学を教えていました。約60名の生徒に電子工学の授業や実験を指導し、また使用する教科書の見直しを行いました。

帰ってきてからのこと

帰国後は、名古屋市商工会議所の職員に対し島嶼国における自然エネルギーの可能性についての講義をするなど、主に地域社会に自然エネルギー分野の啓蒙活動を行っています。また、トンガから帰国後ミクロネシアに再派遣が決まっていますが、新型コロナにより延期になりました。

釧路地域にゆかりのあるOB・OGたち 01

釧路市在住 佐藤 英樹 さとう ひでき

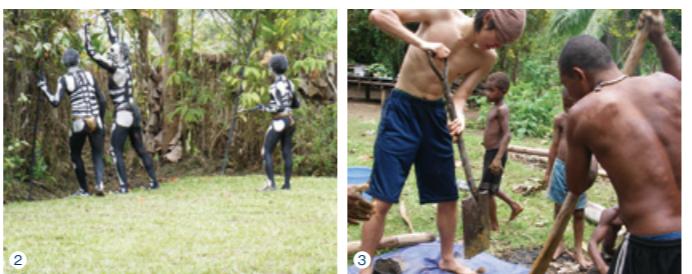


派遣国 パプアニューギニア
職種 村落開発普及員
活動期間 2009年～2011年

笑顔で接する

現地での活動

私は、パプアニューギニアのマダン州にある村々に行き、現地にあら材料を使ったかまど作りや女性グループに料理教室を行なうなど、村人と共に過ごし、生活改善につながりそうなことを試行錯誤しながら行なっていました。



- ① 握った魚やソーセージ、果物が売られています
② スケルトンマン
③ 村人と共に粘土質の土とココナツの殻の纖維を混ぜてかまどを作っているところです

協力隊を経て得たモットー

【笑顔で接する】パプアニューギニア人は良くも悪くも仲間意識が強いです。現地の言葉を使いこなせなく、意思疎通が思う通りにできなこともありましたが、笑顔で接すれば警戒心を解いてくれることが多かったです。コミュニケーションの方法は言葉だけでないことを実感できました。



釧路地域にゆかりのあるOB・OGたち 02

釧路市在住 斎藤 賢之 さいとう たかゆき



派遣国 ラオス
職種 感染症対策
活動期間 2000年～2002年



現地での活動

メコン川に育まれる東南アジアの内陸国ラオス。その中部に位置するカムアン県のマラリアセンターに所属して、僻地巡回型のマラリア診断・治療・予防啓発活動を実施しました。

帰ってきてからのこと

現職参加だったため、元の会社に復帰しましたが、協力隊活動に魅了されました。会社を円満退社し、ラオス母子保健NGO現地代表、国連WFPフィリピン事務所オフィサー、タイ・バンコク周辺で在宅医療と医療通訳、カンボジア・シェムリアップでの病院建設などを経験し、東南アジア生活は足掛け17年となっていました。

- ① 働き始めるミャンマー人材と釧路国際交流の会による支援物資の贈呈
② タイでの在宅医療現場(新人看護師研修の指導にあわせて)
③ ラオス僻地巡回活動中の1コマ

釧路地域にゆかりのあるOB・OGたち 03

釧路町在住 大畑 紗弥和 おおはた さやか



派遣国 ベナン
職種 村落開発普及員
活動期間 2010年～2012年

友情にいかなるボーダーなし。人間の生きる力は無限大！

現地での活動

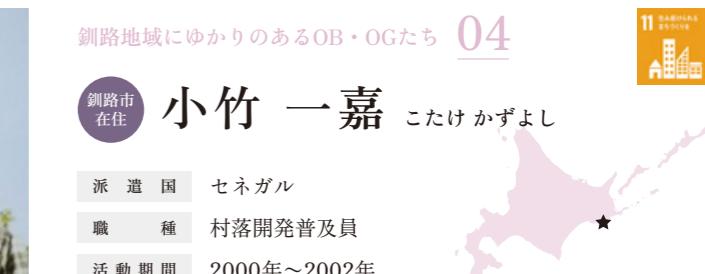
私は、ベナンのアボメーという町の福祉センターに配属され、障がい者グループや女性グループの活動支援、孤児院や小中学校を訪問しての日本文化の紹介や交流などを行いました。毎日町の中を歩き回り、人々と言葉を交わす中で、自分の活動を応援してくれる現地の方々とも出会うことができ、かけがえのない人脈や友情を築くことができました。



- ① 子ども達はカメラに映る自分の姿に大興奮！
② ベナンに伝わる「ブードゥー教」のお祭り。
③ 活動をともにした女性リーダーたち。様々な啓発運動などを行いました

帰ってきてからのこと

帰国後すぐは、バックパッカーとして東南アジア諸国を訪れ、未知なる世界の魅力を発見しました。その後、北海道や大阪の中学校・高校で英語教員として働きながら、新たに「特別支援学校教諭」の免許も取得し、時々、職場や地域でベナンでの体験を紹介させてもらっています。



多様な価値観、考え方、ルールなどがあり、どれも尊重されるべき

現地での活動

都市部での区画再整備を行うプロジェクトチームに所属し、地域の青年団とともに生活環境調査を実施したり、植林活動を行なっていました。住民に不法に占拠された土地を地域住民の参画を促しながら、より生活しやすい土地(地域)に再生するための活動に従事していました。

帰ってきてからのこと

JICAの国内機関や民間企業での勤務を経て、JICA企画調整員としてニジェール、ガボン、タンザニアで海外協力隊の支援業務に従事していました。2016年4月からは、生まれ故郷の釧路市(市役所)で国際・多文化共生関連業務に従事しています。また、町内会役員、消防団員、民生委員、自主夜間中学のボランティア活動などもしています。